

火を使う実験をするとき

関連単元

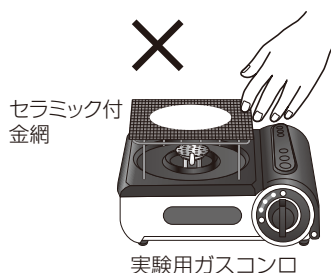
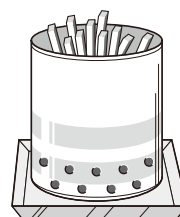
- 1.ものが燃えるとき
- 2.植物のつくりとはたらき(6年)
- 5.水よう液の性質
- 7.ものの温度と体積(4年)
- 8.もののあたたまり方(4年)
- 9.水のすがた(4年)
- 6.もののとけ方(5年)

加熱実験での事故を防ぐ

- 缶の中での燃焼の実験は、屋外のあまり風の強く当たらないところで行い、周りに燃えやすいものがないことも確認する。水の用意を忘れない。服装にも気をつける。
- 実験後、加熱した缶などはしばらくは熱いので、手で直接持たない。
- やけどをしたら冷たい水で冷やすなどの処置をし、医師に見てもらう。
- 燃えがらのしまつのときも水を入れた燃えかす入れに入れ、完全に火を消して集める。ごみ箱などに捨てたりしないよう指示する。
- ガラスびんやガラス管がぬれていると、ろうそくの火でも割れたりひびが入ったりすることがあるので、しっかり乾いているかどうかを確認させる。
- 燃焼や加熱の実験では、実験用の机の上には、燃えやすいものを置かない。濡れ雑巾をそばに置いておくように習慣づけることも大切である。
- 加熱の実験を行ったときに、児童が実験後すぐに加熱されたものをさわってやけどをする事故が多い。物を熱したらしばらくは熱いということを認識させるとともに、使っていない実験用ガスコンロ（アルコールランプ、ガスバーナー）は、消しておくことを教える。
- 実験用ガスコンロを使用する際は、ガスボンベが高温になるような長時間の加熱は行なわない。
- 加熱後、水につけて冷やすと、ガラス器具は割れることがあるので注意する。



水の勢いを加減する。



セラミック付金網

実験用ガスコンロ

熱湯を使うとき

- 熱湯を使う実験では、湯沸しポットなどを使うと便利である。そのときも児童がやけどをしないよう、あらかじめ他の容器に湯を入れておくとよい。

火を使う実験をするとき

● 気をつけること

1

火が燃え移らないように注意する。

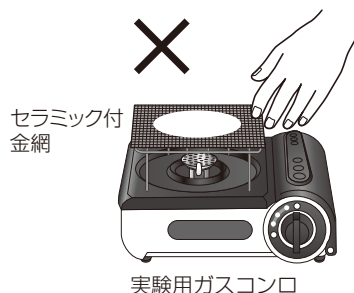
- 近くに燃えやすいものをおかない。
- 服装は、きちんとしておく。
- 机の上は片づけておく。
- 燃えかすは燃えかす入れに入れる。
完全に消えたことを確かめてから、
先生のところへ集める。
- 水を用意しておく。
- 火の後始末は完全に行う。



2

やけどに注意する。

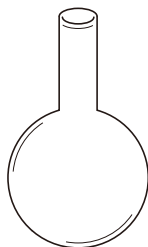
- 加熱したものは、火が消えた後もしばらくは熱いので、さわらないようにする。
- ガスボンベも熱くなっている場合があるので注意する。
- 熱い湯を使う場合も、やけどをしないように十分注意する。
- もし、やけどをしたら、すぐに水でひやし、先生に報告する。



3

ガラス器具に気をつける。

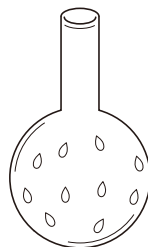
- ガラスびんやガラス管はかわいたものを使う。
⇒ぬれていると、加熱すると割れることがある。
- 加熱したガラス器具は、自然に冷えるのを待つ。
⇒水をかけたり、水に入れて冷やすと割れることがある。



○
かわいたもの



〈加熱に使うガラス器具〉



×
ぬれたもの

